

ベルクソン『試論』における力の概念⁽¹⁾

三宅 岳史

はじめに

力という概念は哲学においてよく用いられる重要な概念であるにもかかわらず、多義的、比喩的に用いられることが多く、哲学者によって用法が異なることもしばしばである。そしてこのことに関して言えば、ベルクソンもまたその例外ではない。しかしそもそも力の概念には、豊かだが雑然とした内容が含まれていたことを考えれば、そのことを直ちに非難するにはあたらないだろう。むしろそのような批判をする際にもまず必要なのは、その内容を構成している背景を考察し、そこに哲学的な問題がどのように絡んでいるかを明らかにすることだと思われる。現在から見ると、一見、過去の哲学の概念が洗練されていないように見えても、逆にそこにはすでに現在の視点が回顧的に入り込んでしまっているかもしれないのである。したがって一方的で不当な評価を早急に下してしまわないためにも、以上のような時代的背景に関する考察が不可欠であるとは言えないだろうか。

本論はこのような観点から、とりわけ『試論』を中心に、ベルクソン哲学における力の概念の特徴を明らかにすることを目的としたい。そこでまず、19世紀半ばに熱力学が登場し、エネルギー保存則と決定論が結びついて自由の問題に対して大きな衝撃が生じていたという『試論』の背景を考察する(1)。次に『試論』第三章の議論を確認し、ここで力の概念に関して論じられるのは決定論に対抗するためであったことを示す(2)。またそこには当時の心理学の議論も反映されていることを概観する(3)。最後に、それらがどのように『試論』の力の内容を構成するのかを示し、その特徴を確認したい(4)。

1. エネルギー保存則と決定論

『試論』が出版されたのは1889年であるが、その力の概念にはどのような状況が反映されているのだろうか。ここではまず力学的な背景を中心に概観することにした。まず力学においても19世紀半ばまで力の概念は、漠然とした雑多な内容を含んでいたと言えるだろう。さらには熱力学や電磁気学などの諸科学が発展したことによって、エネルギーや場の概念がそこから分化し始め、『試論』が書かれた19世紀後半になっても、それらはしばしば入り混じった形で用いられているのである⁽²⁾。その際『試論』の議論に決定的だった

ことは、エネルギー保存則が成立することでエネルギー概念の適用範囲が広がり、さらにはそれが物理的決定論を生み出すきっかけとなったことである。それではエネルギー保存則の成立にはどのような諸要素が存在し、そのうちの何が物理的決定論という世界像に結びついていったのだろうか。

エネルギー保存則の成立に関して、何が重要な契機となったのかについては複雑な要因が絡んでおり、諸説分かれるところである。そこで本論では、そこに機械的な原理を拡大しようという傾向と、有機的な原理による世界観の統一を目指す傾向が、共に含まれていたことに注目したい。例えばクーンの「同時発見の一例としてのエネルギー保存」では、エネルギー保存則の発見の引き金として、「転換過程の利用可能性⁽³⁾、機関(engines)への関心⁽⁴⁾、自然哲学」(Kuhn 73)という三つの要素が挙げられている。これを上に従って整理するならば、前の二つの要素は、物体の運動に限られていた活力の保存則を、熱・電気・化学などへと拡張して、機械的原理の拡大を進めたと言えるだろう。これに対し自然哲学(Naturphilosophie)は、有機体を基本的な隠喩として据えて、すべての自然現象に対する統一的原理を探求した⁽⁵⁾のであり、「エネルギー保存則の発見の哲学的背景を準備した」(Kuhn 99)とまとめることができるだろう。このように、エネルギー概念の成立の内部に、機械的な原理と有機的なコスモロジーという異質的な傾向が混ざり合っていたとするならば、ではどのようにしてエネルギー保存則が決定論と結びつくに至ったのだろうか。

ここでエネルギー保存則と決定論の両者が結びつく舞台として取り上げねばならないのは、生理学である。ところで19世紀の生理学もまた、上述と同様の二つの異質的な傾向を含んでいたと言うことができるだろう。すなわち、生理学的現象を物理・化学に還元しようという機械論的な傾向と、ライプニッツの「生命力」の思想を背景に生命の特殊性を強調する生氣論的な傾向が、緊張関係を保ちながらも共存していたのである。例えば、ビシャからコントを経てクロード・ベルナールにいたる実証的なフランスの生理学だけではなく、ドイツの生理学者リービッヒ、ミュラーも物理・化学への還元論的な側面と生氣論的な側面を両方ともにもっていたと思われるのである⁽⁶⁾。

しかしながら、このような二つの側面の併存に対して異を唱え、生氣論的な要素を徹底的に排除し、物理・化学への還元主義を決定的に推し進めたのが、ヘルムホルツと同じミュラーの研究所にいた生理学者デュ・ボア＝レーモンである。これまでであった生理学を機械論に還元する試みのなかでも、彼が特に際立っていたのは、エネルギー保存則を用いて、厳密な数学的定式を生理学にまで拡大したばかりか、世界全体を決定論的にみなしたということである。彼は、全宇宙が機械のように完全に決定されており、原理的には予測可能というラプラスの言葉を引用し⁽⁷⁾、生理学的現象もそこに含まれるとした。「エネルギー保

存則は、物質も力も生成消滅しないことを告げている。ある一瞬における全世界の状態も、人間の脳の状態も、先立つ瞬間の状態の絶対的、機械的帰結である」(Du Bois-Reymond 399)。

ところでこの世界公式はそもそもラプラス自身にとってさえ、「機知に富んだメタファー(*geistreiche Metapher*)以上のものではほとんどなかった」(Cassirer 135) とカッシーラーは述べている。それによると、長い忘却から(決定論的世界像という)メタファーを蘇らせ、認識論上の普遍的な原理として据えたのは、実はデュ・ボア＝レーモンその人ということになるのである⁽⁸⁾。すなわちデュ・ボア＝レーモンは別々の現象と考えられていた天文学、物理学、化学、そして生理学をすべて機械論的な力に還元する手段としてエネルギー保存則を用い、物理的決定論という世界観をメタファー以上の現実味をもつものとして、ある意味作り上げたのである。そしてまさにここでも、エネルギー保存則と決定論が結びつけられたと言えるだろう。以上で、多義的な力の概念から、エネルギー概念が分化、発展することにより、その成立要因の一つであった有機的な世界像が逆に掘り崩され、物理的決定論が生み出される経緯を概観した。

ただしここで注意せねばならないのは、デュ・ボア＝レーモンは生理学的現象について決定論をとるとしても、精神に関しては不可知論をとるということである⁽⁹⁾。それというのも、エネルギー保存則によれば、脳の状態を完全に知ることができたとしても、機械的原因は残らず機械的結果に変わり、そこから精神現象は何も帰結されないからである。すなわち身体は完全に決定されていても、ここから心理的決定論を導くことはできないということになる。このような立場を、物理 - 生理的決定論と仮に呼ぶならば、『試論』第三章でベルクソンは、力の概念に関してどのような考えをとり、それによってこの議論にどのように対しているのかを見ていくことにしよう。

2. 二種類の力と因果性

ベルクソンは『試論』第三章の冒頭で、「機械論(*mécanisme*)と力動論(*dynamisme*)」(DI 51)という物質に関する二つの形而上学的な体系を示している。まずこれを前節の議論と関連づけると、機械論は自然現象を機械的な原理へと還元する傾向、力動論は有機的な世界観を唱える傾向に対応していると言えるだろう。まず機械論は、受動的な慣性として物質(原子や延長)をおき、慣性から出発して複雑な現象を説明するが、必然性の枠を出ないと見なされている。これに対し、力動論は、初めに能動的で自由な力あるいはエネルギーを想定し、この自由の度合いを段々狭めていき、その度合いが最小のものとして物質をみなすとされる⁽¹⁰⁾。またベルクソンは『試論』第三章の後半部では、この力動論の能動的な力と機械論の惰性的な力を区別し、前者は後者から派生した観念であるとの考えを示している。

「一方では我々は力を意識の証言のみによって知る」(DI 163)のであり、力の観念は必然的決定を排除する自由な自発性として捉えられる。そして「他方ではこの力の観念は、自然のなかに移され…必然性の観念に浸されて戻ってくる」(DI 163)とされるのである。

さらにベルクソンは、この力に関する二つの考え方に対応する因果関係をそれぞれ分析している。一つ目は、機械論的な説明が展開する必然的な因果関係である⁽¹¹⁾。この場合、ベルクソンは二つの帰結を述べている。一つは、「どのような論理的努力も存在したものが存在するだろうということを証明するには至らない」(DI 156)ので、因果関係の必然性は、未来を現在にではなく、現在を現在に繋ぐところに成立することになる、というものである。さらにもう一つは、現象間の見かけの因果関係は、絶対者における同一性の関係に帰着させられ、因果性が同一性に近づけられて必然的になると同時に、持続が消去されるというものである⁽¹²⁾。ベルクソンによれば前者がデカルト、後者がスピノザの説である⁽¹³⁾。

さて、このような因果性の考えが、数学や我々のようには持続しない事物に親近性をもつものに対し、力動論が説明する因果性は、心理的事象や表象に親近性をもつ⁽¹⁴⁾とベルクソンは述べている。この第二の因果性の特徴は、機械論における因果とは反対に、まずそれが必然的な関係ではないということであり、次にそれが持続のなかで展開されるということである。ベルクソンは、この場合、結果が原因の内にあるのは、「純粋に可能な状態でしかなく」(DI 159)、また「この因果の力動的な考えは、それがどんな性質であるにせよ、事物に我々の持続と全く似た持続を与える」(DI 161)と述べている。そして第二の因果性の考えはライブニッツ⁽¹⁵⁾の説に帰着するとされるのである。

したがって以上を単純化すると、機械論—受動的慣性としての物質—必然、力動論—能動的力としての物質—自由というように図式化できると思われる。しかしここで、ベルクソンは機械論と力動論のうちのどちらかが正しい、と主張するわけではないことに注意しなくてはならない。それというのも力動論と機械論の「二つの仮定はそれぞれ離して捉えれば、人間的自由を守る」(DI 162)からである。それは、ベルクソンによれば、力動論が自然のなかに偶然を認める一方で、機械論もまた事物が我々のように持続しないことを強調することで、逆に「持続する自我を自由な力とするように仕向ける」(DI 162)からである⁽¹⁶⁾。このように『試論』では、明確には示されていないとは言え、物質には機械論、精神には力動論が、ある意味併用されていると言えるだろう。

しかし機械論と力動論が共に自由を主張するならば、一体どこから決定論が成立するのか、という問題が残ることになる。ベルクソンは、決定論的なエネルギー保存則が物理的現象にとどまらず、心理的事象に無制限に適用されたり、逆に連合主義的な決定論が心理的事象を説明する際に、物理的な現象に関する決定論に訴えたりすることで、決定論が生

じるとしている。いずれにせよこのような決定論は、エネルギー保存則や必然的な因果関係を、物理現象から精神現象まであらゆる現象に適用する決定論だということになる。つまり、決定論は機械論を無制限に拡大し、とりわけ精神現象に適用することから生じるのである。したがって、『試論』で主に批判の対象とされているのは、デュ・ボア＝レーモンの物理 - 生理的決定論よりも強い、脳の状態に対応する意識の状態も計算可能とするタイプの決定論¹⁷⁾だということに注意しなくてはならない。そして形而上学だけではなく経験的な領域で、エネルギー保存則に基づいた新しいタイプの決定論を哲学的に吟味することは、科学と自由の対立という当時としては非常にアクチュアルな問題だったのである。

しかしそうだとすると、なお問題が残ることになる。それは『試論』ではそれぞれ力動論と機械論に基づく二つのタイプの自由を認めているのではないか、という問題である。力動論では物質や身体のレベルに偶然性が認められることになるが、機械論では非決定性が認められるのは意識だけであり、身体は厳密に機械的決定論に従うことになる。いわば、力動論はデュ・ボア＝レーモンの物理 - 生理的決定論を否定することになるが、機械論は肯定することになる。したがってこの二つの自由の差異は決して小さいものではない。

さて『試論』の結論部をみると、形而上学に対する慎重な態度の裏に、意外にも機械論への親近性と配慮が伺われる。まず、外界には瞬間しか認められず、「外的事物が持続すると言うべきではない」(DI 171)と主張されている。だがそれに対して、ベルクソンは現象に必然的な因果、物自体に自由を帰したカントを「この区別はおそらくあまりにきっちりと分けられすぎている」(DI 176)として批判していることを指摘することもできるだろう。カントに対して強調されるのは、行為の自由であり、それは当然、身体の非決定性を含意していると思われるからである。しかしそれでもなお、『試論』の結論を吟味すると、行為の自由は、その行為が由来する再現不能で独特な「心的状態」(DI 179)との関係に直接帰され、そこでは『物質と記憶』のような身体の不確定性に触れられることはないように思われる。このように『試論』では身体の偶然性はほぼ認められず、デュ・ボア＝レーモンの物理 - 生理的決定論は明確に否定されていないと結論づけられるだろう。では、なぜ『試論』ではこのような立場がとられたのだろうか。この点に関して、我々は、さらに『試論』の力のもう一つの側面を明らかにするため、今度は当時の心理学の背景を探ることにしたい。

3. 努力の感じと力の概念

第一節では、当時の力学的背景を見たが、本節では心理学的背景を概観したい。ここでは、『試論』でも参照されているジェイムズの「努力の感じ(The Feeling of Effort)」という論文¹⁸⁾の議論とベルクソンの力の概念を比較しておきたい。それというのも、ジェイムズ

のこの論文は、まさに力の概念に関わるものであり、『試論』の背景を照らす助けになると思われるからである。「努力の感じ」の論題は、努力にしばしば関連づけられて論じられる筋肉感覚が、遠心性の(efferent)感覚か、求心性(afferent)の感覚のどちらであるのかというものである。ジェイムズは遠心性の説を批判するが、その説は、我々が意志をもつと、それが力(努力)として意識され、その力が遠心性の神経を通して伝わり、その刺激が筋肉の力-感覚として現れるという理論(will-muscle-force-sense theory)である。ジェイムズは、このような説が、実際にはミューラーに始まり、ペイン、ヴントなどによって広まったと説明しているが、さらにその先駆者としてメーヌ・ド・ビランの名を挙げている⁽¹⁹⁾。

これ対して、ジェイムズは、心理学や生理学の実験から、我々が筋肉に関して努力の感じをもつのは、筋肉の緊張や収縮を伴う動作が求心性の神経を刺激し、そこから感覚が由来するためであるという求心性の説を示すのである。したがって、この場合、求心性の神経に刺激があるときのみ、我々は筋肉に努力の感覚をもつことができるということになる。ここからさらにジェイムズは、その背景にある様々な哲学的議論へと進むのであるが、以下ではその議論の要点のみを整理して示すことにしたい。

まず①筋肉感覚は求心的な神経経路から生じるので、②遠心性の神経刺激の感覚といったものは存在しないということになる。そうすると、心から筋肉へと遠心的に流れて動作を起こす力のようなものは、疑わしい存在になるので、③力の感覚を、意志と筋肉の収縮の間に置いて、内的な世界と外的な世界(inner and outer worlds)を結びつけることはできない。そうとはいえ、ジェイムズはすべての感覚を神経刺激に還元することはせず、④力すなわち努力は、筋肉的な努力(muscular effort)と精神的な努力(mental effort)の二つに識別しなければならない⁽²⁰⁾とする。⑤この精神的な努力は、身体や外界へ力を放出する経路をもたないので、内的な世界のなかでのみ発揮される。それは、複数の観念から一つを選択する能力であり、選んだ観念に実在の感覚(sense of reality)を与えて存続させる力である⁽²¹⁾。⑥この努力が偶然であるか、前もって決定されているかによって、自由が実在するか、しないかが決まる⁽²²⁾。(ジェイムズはこの問題は未解決であり、性急に解決する必要はないとしつつも、自らは自由の立場をとると表明している。)

以上のようにジェイムズは、筋肉感覚が求心性であるという主張から、自由意志に至るまで様々なことを論じるのであるが、力に関して整理すれば、次のようにまとめられるだろう。つまり、心から筋肉に流れる、あるいは外界と内界をつなぐような力は存在せず、筋肉的な努力と精神的な努力を識別すべきであり、精神的な努力は内的な世界のなかで限定されねばならないのである。それでは、ベルクソンが力に関する思考を洗練させていくなかで、このジェイムズの議論が、どのように関わることを見えていくことにしよう。

ここでは、ベルクソンの力の概念に関して、次の二点を軸に考察を進めていきたい。第一点は、力と身体あるいは筋肉感覚との関係であり、第二点は、力と心理的事象の関係、ジェイムズ流に言うならば精神的努力である。まず『試論』以前の時期とされ、まだジェイムズが参照されていないクレルモン＝フェランの「心理学講義」を見ていきたい。そこではまず、「私が自我と呼び、私と呼ぶようなこの力は、身体のなかにあるとはいえない。その力を身体に見つけられるならば、それはどこにあるというのだろうか。」(*Cours I* 26)とされ、力である自我は身体との関係では捉えられていない。そして心理的事象は空間を占めないで測定不能だが、ある種の強度をもつとされる。第二点の心理的事象に関しては、我々は自らの内にも外にも現象の継起を見出すだけで、そこには因果性や力の観念は見つからないというイギリス経験論に対して、我々の意識は力＝原因＝実体であるような自我を知覚できると⁽²³⁾という反論がなされる。重要なのはここで、「継起する心理的事象の背後に」(*Cours I* 110)そのような自我が存在するとされることである。

さて、自我である力が身体のなかに見出されないという説は、『試論』第一章ではジェイムズの「努力の感じ」が参照される箇所でも、さらに展開されている。ただしベルクソンは、筋肉感覚が遠心的か求心的かという問題には、『試論』第一章の議題ではないので、関わらないとしている。しかしそれでも、心のなかに場所は占めないにもかかわらず、大きさをもつとされる強度量を批判するという立場から、心のなかにある力が身体に流れるという説を批判している⁽²⁴⁾。このような力の批判は、『試論』以後のアンリ四世校の「心理学講義」でも引き続き見出される。ここでベルクソンは、ジェイムズの論文でも取り上げられていたメヌ・ド・ビラン⁽²⁵⁾に対して一定の評価を与えつつも、力である自我が、筋肉の努力を対立項として捉えられるというビランの主張を退けている。「意識が力という形で、あるいはまた、外的諸力への抵抗として知るような純粋に強度的な自我(*moi purement intensif*)という思想は放棄すべきだと思われる。」(*Cours II* 300)

それに加えてベルクソンは、力と心理的事象の関係に関しても、ビランに批判を加えている。それは、ビランやその後継者は、我々の意識は外的諸力に対立する一つの力に直接的に到達し、その力こそ自我そのものとするのだが、内的生の流れから絶対的に区別される存在を直観することは不可能だからである。しかし『試論』以前の「心理学講義」ではベルクソンも同様に、自我を力とし、継起的な心理的事象から明確に区別していたのではなかったのだろうか。ここには、持続の流れのなかに生きた自我を見出すようになった『試論』への立場の変化が現れているということができよう。この移行がどのように起きたのかを答えることは困難であるが、この移行の前後でジェイムズの議論が、ベルクソン自らとビランとの距離が測るために使われ、それによって力の概念が洗練されたというこ

とはありえるように思われる。そしてここでベルクソンは、強度としての自我に対し、心的諸事象が相互浸透する自我を示し、今度は「この自我は能動性(activité)⁽²⁶⁾である」(*Cours II* 301)としている。ではここで言われている能動性としての自我とは何であり、強度的な自我とはどう違うのか。今度はそれを 1900 年の講演「因果性ノート」⁽²⁷⁾から確かめたい。

「因果性ノート」では、『試論』の力動的な因果性と必然的な因果性への確信がいかにして生じるのか、という問題が扱われている。簡潔に言えば、前者の起源は自我の動的な能動性、後者の起源は身体（神経組織）が形成する習慣である。では、この自我の能動性とはどのようなものと考えられているのだろうか。それは、自我が原因と結果を媒介するために、原因に溶け込んで予期された結果へと能動的に向かうことであるように思われる。

「…原因が単に結果に先行する代わりに結果まで続くようにするため、我々の努力のあるものを（自由や偶然性を差し引いて）原因に貸し与え、この原因に我々が自らの自我の連続性についてもう意識をつけ加えることで、我々は、言ってみれば原因と結果の間に入るのである。」(M 423-424)おそらく、能動性のポイントは、自我が原因や結果に密着し、切り離されないという点と、原因 - 結果がともに内的世界にとどまり、外的世界に向かうのではないという点であり、これらが前段落の強度としての自我との違いだと言えるだろう。

しかしベルクソンが『試論』では、強度という概念を完全に捨て去っているわけではないことは、確認しておく必要があるだろう。量ではなく、測定不可能な質を強度に結びつけることで、ベルクソンは自分なりの強度の再定式化を行っているように思われる。しかしそれではこの概念の実質はどこにあるのだろうか。それは『試論』の後にますます重要性が高まるような、緊張の度合いという考えにあるように思われる。そしてこの度合いの概念は、心身結合や直観の概念に結びつくことを考慮に入れると、強度量の批判の裏にある、新たな強度概念の創造という積極的な側面を見逃すべきではないであろう。

ところで我々は、前節の終わりに、ベルクソンがなぜ機械論と力動論を併用する形で、物理 - 生理的決定論を退けなかったのかという問いを立てていた。我々は以上のような考察から、その一つの要因を見ることができよう。それは、ベルクソンが心から筋肉へと流れるような力を放棄する方向に力の概念を洗練させていったならば、身体の新決定性を実現するために、心的な力のようなものを想定し、それを何らかの方法で身体に流入させることはひとまず留保しなければならないからである。したがって、エネルギー保存則を批判しつつも、それを破ることは慎重さを見せて、機械論に配慮したという理由のほかにも、以上のような力の概念に関する心理学的な背景が、『試論』では物理 - 生理的決定論にとどまる一つの要因となったと考えられるのである。

4. 不可逆性と自由な力

さて、ジェイムズが「努力の感じ」で努力を筋肉的努力と精神的努力に分けたように、『試論』でも二種類の力が分けられるように思われる。それは第二節で見たように、一方は必然的な因果に従う惰性的な力であり、他方は偶然を含む因果における能動的な力である。そして前者は物理的現象に、後者は心理的現象に適用され、それぞれ機械論、力動論が当てはまり、両者がある意味で併用されているということも見た。ところで物理的現象では、エネルギー保存則が成立するが、前節で見たように、力動論的な力が、内的な世界から外的な世界へと流れ出て、保存則を破ることで自由を確保することは避けられた。しかしこれと同様に、第二節で見たように、エネルギー保存則を心理的現象に拡大適用することも禁じられているのである。ここではなぜ心理的事象には必然的な保存則が成立せず、自由が可能になるのかを考察することで、さらに『試論』の力の特徴を明らかにしたい。

まずベルクソンは、物質の何かが保存されるという信念は、「惰性的な物質が持続しているように見えず、少なくとも流れた時間のいかなる痕跡も保存しない」(DI 115)ことから由来すると述べる。そして保存則を適用できる条件は、「動くことのできる点がそれぞれの最初の位置に復帰できる(*revenir à leur position première*)」こと、すなわち系が可逆的であることだと指摘する。言い換えると、保存則が成立する必然的な因果では、原因は自らと等しい結果を生み出して消滅すると見なされるので、過去の痕跡をもたない瞬間的現在だけが存在することになる。つまり、瞬間的現在を互いに独立させて保持し、それらを等号で結ばれた可逆的なものとするような力の概念が、保存則を適用可能としているのである。

そしてこれに対しベルクソンは、この可逆性という保存則を適用する条件を心理的事象には当てはめることができないと指摘する。「意識的事象の領域では、逆戻りの仮説(*l'hypothèse d'un retour en arrière*)が理解できなくなることは認められるだろう。ある感覚は長引くということだけで耐えがたくなるまで変化する。ここでは同じものは同じものにとどまらず、その過去全体に補強され、増幅されるのである。」(DI 115)心理的事象に親近性をもつとされた力動的な因果性の要点は、前節で見たように、自我が原因と結果の間に入り、原因を結果のなかまで延長させることであった。ベルクソンは「原因は働きかける力であり、自ら産出する結果に現存し、結果と同時(*contemporain*)である」(M 426)と述べている。ここでは原因は結果を生み出して過去となっても消滅せず、現在の結果のなかに存続するため、結果は絶えず不可逆的に増大し、原因と結果が等しくなるような可逆性の条件を満たさないのである。ここで力の概念は、独立する現在の瞬間を保持する力ではなく、能動的な精神が過去を現在へ不可逆的に流入させる力となるのである。おそらくこの点に、ジェイムズとベルクソンの違いも存在すると思われる。ジェイムズの場合は、前と後の瞬

間の移行が連続的であるということは述べるが、後の瞬間が前の瞬間を含み、不断に増大していくことに関しては強調していないと思われるからである。

そしてベルクソンは、この意識の不可逆性を、可逆的な保存則がもたらす必然性を逃れる力動的な力として、自由と結びつけ、次のように述べている。「時間の作用に従い、持続を蓄えるという、まさにそのことによって、エネルギー保存則から逃れる意識的な力や自由意志についての仮説に有利な推定を引き合いに出せないだろうか。」(DI 116)ここからも理解されるように、意識的な力や自由意志が存在するから、我々の意識が持続するのではない。反対に、心理的事象の不可逆な持続が、まさしく意識に直接与えられるからこそ、我々ははじめて保存則を逃れる力に関する、力動論のような形而上学的仮説を立てることができるのである。これこそ『試論』の最も基本的なストラテジーであり、したがって、ベルクソンは、いかなる形而上学の仮説も持ち出さずに、この心理的現象をまさにそれが我々に現れるままに、留保することなく肯定するように求めるのである。

それでは最後に『試論』の力の概念に関する特徴を述べて、論を結びたい。第一に、それはまず何よりも過去を現在に浸透させる力である(不可逆性)。第二に、この力は必然的なエネルギー保存則の条件を適用できない自由あるいは偶然な力である(偶然としての様相)。第三に、この力は計測可能な強度量ではなく、質や緊張の度合いと密接な関係をもつ(計測不可能性)。第四に、この能動的な力から、惰性的な力の観念が派生するとされ、『試論』の二種類の力が説明される⁽²⁸⁾。最後に、これらの力は持続という直接経験から引き出される仮説であり、実体のような強い性格は与えられていない。

むすび

『試論』における力動論と機械論の二種類の力は、強度的な力の批判と結びついて、心理的決定論を退けても、身体が決定されているいわば物理 - 生理学的決定論を退けられないという問題が残る。この問題が、ベルクソンを『物質と記憶』の新たな立場へと導く大きな要因の一つとなったと思われる。そしてそこでは、身体の次元にも部分的に非決定性を認めるという新たな立場が示されることになるのである。「徹底的な機械論や物理的決定論への我々の批判から引き出されるように思われるのは…自由に科学を対立させるのは間違いだということである。科学はあらゆる事象がその条件によって決定されることを要求する、すなわち科学は普遍的決定論を含んでいるのだと言われる。我々はこう答えることにしよう、本来的に単一の科学が存在するのではなく、複数の科学が存在するのだと。…生命の領域に部分的な非決定という観念を受け入れても、物理学者や科学者の手法の厳密さは全く減らない。」(Cours II 246-247)しかし『試論』の立場を廃棄することによって、こ

の立場へとベルクソンが進むことが可能になったと見なすのは誤りであろう。ここでも当時の科学と緊張関係を保ちながら哲学的思考を重ねた『試論』の姿勢は保持されており、また身体の非決定性は、『試論』の力動論の力や因果性の概念を拡大していくことによって、初めて可能になったと言えるからである。

以上で『試論』の力の概念が、当時の科学と緊張関係の上に成り立つものであることを示してきたが、科学は時代とともに発展し、ベルクソンの当時の科学の内容は古びたものになっていることは確かである。しかしそのような限界を認めることで逆に、例えば心身問題や因果性などの哲学にとっていまだに重要であるような、示唆や洞察を取り出してくることが可能になると思われる。そのような作業の一端をなすことが本論の主な目的であることを、本論の冒頭でも述べたが、もう一度ここで最後に付け加えておきたい。

註

- (1) 本論では『試論』を『意識に直接与えられたものについての試論』の略記として用いる。
- (2) 漠然とした力の概念から、場やエネルギーの概念が分化してくるプロセスに関してはエルカナ『エネルギー保存の発見』を参照した。cf. Elkana 2-3, 14-18, 131-133, 161.
- (3) 転換過程とは、個々別々の現象であると考えられていた、熱、光、電気、磁気、化学親和力、運動などが、力として他のものを作り出し、他のものへと転換されるという概念である。クーンは 1800 年ころにボルタの電池の発明を始めとして様々な転換過程の利用が可能になり、そしてそれらが実際に転換過程と見なされはじめたのは 1830 年以後の 10 年間であるとしている。逆にいえば「18 世紀にはそれらは孤立した現象であり、科学的研究に中心的な重要性をもつとはほとんど見なされていなかった」(Kuhn 74)のである。
- (4) エネルギー保存則に到達するためには、力の相互転換という概念だけでは不十分であり、それに加えて原因・結果の同等性という保存の概念と、また保存される量の定式化が必要である。しかしこの定量化には非常に困難が生じたとされている。またこの定量化の困難は、例えばエネルギー保存に関するマイヤーやヘルムホルツの論文も思弁的だとして初めに掲載を拒否されるなど、力概念からエネルギー概念が分化する際の力の概念をめぐる混乱と無関係ではないと思われる。クーンが機関への関心を重要視するのは、それがまさに仕事の概念(距離と力の積)の使用を広め、保存される量の定式化の確立に役立ったと考えるためである。クーンはサディ・カルノーとその後 1820 年以降のフランスの文献を除いては、仕事と活力の関係を直接的に把握できていないことを指摘し、通説で認められているようなエネルギー保存則を活力(mv^2)の保存側の単なる拡張と見なしていない。
- (5) クーンは「多くのエネルギー保存則の発見者が、すべての自然現象の根源に単一で不滅の力を見る傾向性が前もってあった」(Kuhn 96)と指摘し、自然哲学のルーツをシェリング、カント、ヴォルフ、ライプニッツへと遡らせている。
- (6) ヘルムホルツもまた『力の恒存について』を書く前に、「筋肉作用の物質消費」、「腐敗と発酵の本質」などの生理学の論文を書いており、「この時点でヘルムホルツは非局所的な生命力の機能を保持しつつも、生物学的现象のほとんどを物理・化学のプロセスに還元しようとしたリービッヒ・スタイルの生氣論を受け入れていた」(Elkana 111)とされている。cf. Elkana, chapIV, Physiological Background
- (7) デュ・ボア＝レーモンが引用するラプラスの『確率の哲学的試論』の議論を、ベルクソンも『創造的進化』で取り上げている。「自然を活気づけるあらゆる力とその力を構成する諸存在の各々の状態を知る絶対的知性が、これらの所与を分析するのに十分に広大であるならば…その知性にとって何一つ不確かなものではなく、その目にとっては過去も未来も同様に現在となるだろう」(EC 38, Du Bois-Reymond 107)
- (8) cf. 伊藤邦武「自然哲学のゆくえ」、第 6 日 決定論の崩壊。ここではデュ・ボア＝レーモン以前には、

決定論という概念がそもそも存在していなかったことが指摘されており、1. 17世紀や18世紀の決定論に相当する言葉は宿命論や先決定性であり、そこでは神と人間の緊張関係が問題であった。2. 神が退場し、物理的決定論が前面にあらわれ、人間知性への絶対的な信頼がメタファーとして表現された。3. メタファーが根本概念として宣言された、という決定論に至る三段階が示されている。

(9) 「この〔エネルギー保存の〕法則の想定する以上のことも、以下のことも物質界には起こりえない。すなわち機械的原因是はすべて機械的結果にかわるのである。…精神的現象は因果法則の外に立つのであり、それは永久機関 (*Mobile perpetuum*) を理解できないのと同様なのである。」(Du Bois-Reymond 122-123)

(10) 試論より前の時期の『ベルクソン講義録 I』『形而上学講義』では、機械論と力動論に関してより詳しい説明がされている。「機械論者が物質を完全に受動的で動かないものにしてしまうのに対して、力動論者は物質を本質的には能動的な力として捉える。」(*Cours I* 335)

(11) ベルクソンはこの機械論的な因果関係を徹底した一例として、ウィリアム・トムソンのヴォルテックスを挙げている。それによると、まず継起する物理的現象から「色、熱、抵抗、重さ」(DI 154)といった性質を剥ぎ取ることになり、次に残った形さえも運動の抽象的な公式に置きかえられることになり、「自然現象の具体的な実在が代数的な煙へ蒸発する」(DI 156)とされる。ベルクソンはここで、ラグランジュにより発達した解析力学を念頭に置いていると思われる。

(12) 「因果関係が必然的關係であるのは、曲線が漸近線に近づくように、それが無際限に同一関係に近づくという意味においてである。」(DI 156)

(13) 「デカルトはこのことをよく理解していたので、物理世界の規則性を絶えず新たにされる摂理の恩寵に帰した」のであり、「スピノザは、我々に対しては時間において継起の形式を取る現象の系列が、絶対者においては神の単一性に等しいと主張した」(DI 156)とされている。

(14) 「外的性質や現象の継起を、我々自身の観念の継起と同様に理解するならば、これらの性質を単純な状態または知覚とし、それらを支える物質を、我々の魂に類似した広がりがないモノイドとしなければならない。」(DI 160)

(15) ベルクソンは、実体相互の機械的影響を否定したライブニッツの「決定論は、予定調和を認める必要性に起源があるのであって、因果関係の力動的な考えにあるのでは全くない」と主張し、「ライブニッツのモノイドの知覚はお互いに必然的に決定し合わない」(DI 161)と述べている。

(16) ベルクソンは、事物は我々のようには持続しないが、また一挙に展開されることもないので、機械論の明晰で精密な説明によって、因果関係が同一関係に無際限に近づくにもかかわらず、両者が一致するように我々には思われまいだろう、と述べている。

(17) 厄介なことに、ベルクソンは『講義録』では、デュ・ボア＝レーモンやランゲが実際の彼らの説よりも強い、意識の随伴現象説や心理的決定論を主張しているとみなしているようである(*Cours II* 244-245)。しかしながら『試論』『創造的進化』などの著作では、このような行き過ぎは見られず、むしろ『試論』ではデュ・ボア＝レーモンの心理的決定論批判が部分的に使われているように思われる。

(18) ベルクソンは、ジェイムズ宛書簡などで「私が『試論』を書いたとき、『努力』についてのあなたの論文しか知りませんでした」(M 580)と述べている。その意図は、持続の概念が成立する際に、ジェイムズに影響を直接的には受けていないことを表明することにあるのだが(他には、cf. M 656-658.)、力の概念に限って言えば、ベルクソンは、多少なりともジェイムズの議論の影響を受けているように思われる。

(19) ジェイムズは、バインやヴントたちとメーヌ・ド・ピランを全く同じ立場とみなすわけではない。その最も大きな違いは、ピランが筋肉の感覚を遠心性とは見なさなかったことである。しかしジェイムズは、ピランが意志による努力に対する抵抗として筋肉感覚を見なすときに、その抵抗を筋肉感覚だけに限ったことを批判し、他の諸感覚も同様に抵抗になりえると論じている。「確かにメーヌ・ド・ピランは、その後継者たちのように、筋肉の抵抗を遠心性の感覚としたのではなかったけれども、彼はこの抵抗する項を筋肉と見なしたのである。」(James 102, n. 22)

(20) 「意志を行使すること、やわらかい筋肉をかたくすることとは一つのことではなく、全く異なった二つのことである。」(James 115)

(21) 「後者の立場〔決定論〕が正しければ、本当の自発性も、決定の曖昧な能力も、信じることも行為することもいずれも真の自由も存在しない。一方の観念にやってきて補強するよう見える努力は、実在の感じを与えることで、闘技場にいる諸観念に自らつけ加わる新たな力とはなりえない。」(James 118) ジェイムズが、この論文のなかで自由の立場に立つことを示していることを考慮に入れれば、この引用文の反

対のことが暗黙のうちに想定されていると考えられるように思われる。

(22) 「努力の感じ」のジェイムズの立場は、最終的にはライプニッツ的な心身平行論に帰着するように思われる。「観念が現実化されるとき、対応する神経経路は変化するはずであり、また同様にして段々筋肉も収縮するということは、内的世界と外的世界の数ある調和のうちの一つであり、その調和を前にして我々の理性はただ自らの無力を認めることができるのみである。」(James 123)

(23) 「魂のなかで成し遂げられる現象のしたに、継起し、過ぎ去り、互いにおきかわる心理的事象の背後に、一なる同一的な自我を、同時に実体であり原因である自我を、意識は我々に知覚させると結論しよう。」(Cours I 110)「自我は我々に能動的な力(force active)として現れる、あるいは哲学的表現を使うなら、原因として我々に現れる。実際、我々にとって原因は能動的力の同義語である。——ここで再び我々は自我が唯一の能動的力であり、我々が直接認識する唯一の原因であることに注意しよう。」(Cours I 100)

(24) 「心的な力は、あたかもアイオロスの洞窟のなかの風のように、魂のなかに閉じ込められており、外に飛び出す機会を伺っているように思われる。意志がこの力を見張っていて、時折、出口を開けて、望む結果にその流れを釣り合わせるようにするのである。努力に関するこの非常に雑な考えは、よく反省してみれば、強度量への我々の信仰の大きな部分をなしているのである。」(DI 14)

(25) メーヌ・ド・ビラン、スペンサー、ジェイムズをめぐる心理学的な力の概念と、力学の力の概念の関係に関する歴史的な流れを簡潔にまとめたものに関しては、Jammer 230-236 を参照にしたが、本論では、心理学的な力の概念や強度の概念に関しては、十分に調べることはできなかった。

(26) ここには活動性という意味も込められているだろう。力がある実体を予想させるのに対し、活動性は動きそのものを予想させる。いわばactivitéには、能動と活動という二つの要素が含まれていると思われる。

(27) 本論では、「因果性ノート」を「因果性へのわれわれの確信の心理学的起源についてのノート」(M 419-428)の略記とする。ここでもまた、ビランの評価と批判がなされていることは注目すべきである。

(28) 初期の『講義録』や『試論』では、能動的な力が、精神から外界へ投射されることで、必然性を帯びるというように説明されている。『物質と記憶』の立場からすると、緊張の度合いが両者を結びつけると考えることもできるだろう。それに対して「因果性ノート」では、二つの力は意識の能動性と身体の習慣という別々の起源をもち、派生という説明を取っていないように思われる。

参考文献

- Bergson, Henri DI : *Essai sur données immédiates de la conscience*, PUF (Quadrige), 1927
EC : *L'évolution créatrice*, PUF (Quadrige), 1941
M : *Mélanges*, PUF, 1972
Cours I, ed. Hude, PUF, 1990
Cours II, ed. Hude, PUF, 1992
- Cassirer, Ernst “Determinismus und Indeterminismus”, in *Zur Modernen Physik*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1957
- Du Bois-Reymond, Emil *Reden von Emil Du Bois-Reymond*, erste Folge, Verlag von Veit & Comp, 1886
- Elkana, Yehuda *The Discovery of the Conservation of Energy*, Hutchison educational, 1974
- 伊藤邦武 「自然哲学のゆくえ」、『新・哲学講義⑤ コスモロジーの闘争』、岩波書店、1997年
- James, William *The Works of William James, Essays in Psychology*, ‘The Feeling of Effort’, Harvard University Press, 1983
- Jammer, Max *Concepts of Force*, Dover Publications, reprinted 1999,(1957)
- Kuhn, Thomas *The essential tension*, University of Chicago Press, 1977

〔京都大学文学研究科 COE 研究員〕

※本研究の一部は、21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」によるものである。